2025 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	**蘭学の家における儒学の位置付けに関する研究** **－大槻家を中心に－**
キーワード	①蘭学、②儒学、③水戸学

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏　名	アソ　アユミ 阿曽　歩
配付時の所属先・職位等 （令和 7 年 4 月 1 日現在）	フェリス女学院大学 全学教養教育機構 講師
現在の所属先・職位等	フェリス女学院大学 全学教養教育機構 講師
プロフィール	2020 年 3 月に国際基督教大学大学院博士後期課程を修了、博士（学術）の学位を取得。2022 年 10 月にフェリス女学院大学に着任。 日本思想史の立場から近世日本の学問・教育史に関する研究をおこなっている。特に地域における学問や教育の展開に関心を持ち、東北諸藩を主な対象として研究を進めている。

1. 研究の概要

近世日本の学問継承のあり方の一つに「家学」がある。家に伝わる学問を子孫が受け継ぐ手法である。たとえば、国学者本居宣長の学問は、子の春庭、養子の太平により、書物や私塾での教育を通して継承された。他にも、伊藤仁斎・東涯や平田篤胤・鉄胤のように、著名な学者の家では「家学」という形で学問が継承されてきた。このように、近代以降の学問が基本的に「個人」に帰属するのに対し、近世の学問は「家業」という職業意識のもとで発展してきた側面がある。

しかし、本研究課題で注目する大槻家については、個々人の学問に対する研究が主であり、大槻家の「家学」として総体的に考察されることはほとんどなかった。その理由のひとつは、大槻家の人々の学問の多様性にある。「蘭学の大家」と称された蘭学者玄沢、その息子の儒者磐渓、さらにその息子の博学者如電、『言海』を編纂した国語学者文彦と、彼らが修めた学問分野は多岐にわたる。一見すると「家学」という繋がりが見えないが、後述するように彼ら江戸大槻家のみならず、仙台大槻家、また一関の宗家も加えて考えると、彼らの間にはひとつの「家」としての学問的紐帯が見えてくる。

そこで本研究では、蘭学の家である大槻家を中心に、彼らの家において儒学がどのような位置付けであったのかという問題意識のもと、近世日本の学問の継承について考察した。なお、本研究課題の採択と同時期に同研究題目の科学研究費助成事業（課題番号 25K16013）に採択されたため、本研究では大槻家の人々の対外認識に関する思想について考察するとともに、大槻家の人々の学問と水戸学との関連に注目して、彼らの学問の継承について考察することとした。

2. 研究の動機、目的

大槻家の「家学」に注目するに至った背景は、博士論文執筆時に遡る。筆者は博士論文にて大槻平泉の学問について研究した。平泉は仙台藩校養賢堂の学頭を務め、学制改革をおこなった儒者である。平泉とその息子習斎の家は、玄沢らの江戸大槻家に対し、仙台大槻家と呼ばれ

る。江戸大槻家と仙台大槻家、そして一関の宗家の間には、強い精神的紐帯のあることが先行研究により指摘されていた。平泉も玄沢の息子玄幹と数年間にわたって日本各地を共に遊学しており、親戚付き合いを超えた家同士の繋がりが見て取れる。こうした関係性に加えて、筆者は博士論文執筆時の史料調査や研究を通して、大槻家の間に密接な知的交流があったことを知った。これまで注目されてきた江戸大槻家のみならず、仙台大槻家や宗家を共に検討することで、大槻家の人々の間の知の相互扶助ともいうべき交流の実態を見ることができた。博士論文においては、蘭学的側面における江戸大槻家からの働きかけなどを指摘するにとどまったが、今後はさらに大槻家の人々の知識の基盤である儒学的側面における知的交流の実態を明らかにすることで、「家学」としての大槻家の学問の特徴を論じることができるのではないかと考え、本研究課題を着想するに至った。

3. 研究の結果

蘭学の家における儒学の位置付けについて考察するにあたり、本研究では、仙台藩校養賢堂の学頭を務めた平泉・習斎父子および磐渓に注目して考察した。まず、彼らの対外関係にまつわる思想について考察するために史料調査・文献調査をおこなった。

磐渓の対外認識は、子孫の記述が示すように「ロシヤ贔屓イギリス嫌ひ」（『磐渓事略』）である。これは父玄沢にも似た傾向が見られ、またレザノフ来航の目撃を機にロシアへの関心を持っていた平泉や、国内で唯一藩校にロシア学を導入した習斎にも、少なからぬ影響を相互に与えていると考えられる。


宮城県図書館での史料調査の様子

そこで本研究では、彼らの間にこうした対外認識が形成されていく過程について、儒学的知識の影響を踏まえながら分析を進めた。その結果として、彼らの間には華夷意識にもとづく世界各国の華夷の判別や、各国の風俗への理解にもとづいて世界各国を評価する見方の影響があることがわかった。ただし、これらの分析は現段階では十分とはいえず、今後も継続して検討を進める予定である。

また、大槻家の人々の対外関係に関する思想について、同時代の学者と比較検討するため、水戸藩の会沢正志斎についても調査をおこなった。会沢正志斎はイギリス人が武器を所持して水戸藩領に上陸した大津浜事件の際に筆談役として対応した経験から、国のあり方を論じた『新論』を著した（1825 年執筆、1857 年刊行）。本研究では、正志斎の『新論』と平泉の『経世体要』を、特にキリスト教の記述と「国体」の保持についての記述との関係性に注目して分析した。両者ともに、西洋諸国におけるキリスト教の影響力の大きさを論じるが、キリスト教の内容自体は簡易なものと評価する。ただしこの評価は、必ずしも言葉通りの意味ではない。当時の民衆に対して、正志斎は心の拠り所となるべきものがないと考えており、平泉は「国体」を蔑む風潮があることを懸念していた。そこに「簡易な」キリスト教が広まることは、正志斎が憂慮したのと同様に平泉にとってもまさに警戒すべき事態であった。こうしたキリスト教認識が彼らの「国体」論の下地となっていたのであった。今後はさらに、大槻家の人々の間に見られるキリスト教への関心と、海防論との関係性も踏まえながら検討を進めたい。

4. 研究者としてのこれからの展望

まずは、本研究により得られた成果を論文にまとめて学会誌に投稿する予定である。また、本研究課題で得た成果は、先述の同研究題目の科学研究費助成事業に引き継ぎ、本研究課題では取り組むことのできなかった、他の蘭学の家である桂川家や宇田川家との比較検討などもおこなうことにより、さらに研究を発展させて、単著として出版したいと考えている。

本研究において注目した「家学」は、近世から近代へと学問のありようが大きく変化するなかで重要な分析概念のひとつであるといえる。大槻家は近世から近代まで活躍した学者の一

族である。今後も大槻家を通して、また同時代の家や学者との比較検討を通して、近世から近代へと至る学問の変遷について、断絶性と連続性の両側面から研究したいと考えている。

5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

この度は、本研究課題にご支援いただき、誠にありがとうございました。ご支援により、今後の研究の基盤となる基礎的文献の購入や史料調査が可能になりました。今回の研究で得られた成果をさらに発展させ、学術論文や単著として発表し、広く社会へと貢献できるよう引き続き精進してまいります。